

「これまでの薬学は、薬物の“物性（化合物）”に焦点が当てられていた。しかし、6年制の薬学は、様々な角度で物事を見る複眼思考を養って、薬物と患者を取り持つ知識と技能を学ばねばならない」——大阪大谷大学薬学部漢方医療薬学講座の谿（たに）忠人教授は、6年制薬学教育の理念をそう定義する。大阪大学薬学部で生薬材料学と生薬化学の立場から漢方薬の基礎研究を行い、近畿大学の東洋医学研究所にも在籍、臨床現場における漢方薬の応用研究に携わってきた谿教授の言葉だけに、なるほど説得力がある。「漢方薬を含む処方せんに関して、西洋薬と漢方薬の情報を複眼思考で吟味し、症例に応じて解析できる薬剤師を育成したい」と強調する谿教授の教育手腕は、ほかの薬科大学からも注目されている。

谿教授は、「大阪大学薬学部の卒業研究配属の際、生薬材料学研究室で初めて生薬・漢方に出会った」と懐かしそうに振り返る。当時は、「生薬の“物性（基原植物）”の解明が中心で、臨床でどのように応用されているのかは、あまり考えていなかった」という。

1967年に大阪大学薬学部を卒業後、同大大学院薬学研究科に進学。71年には、同大薬学部生薬学教室の助手に就任した。

77年に近畿大学東洋医学研究所に移ってからは、漢方外来や臨床カンファレンスに陪席する機会を得て、「医師の漢方診察や漢方薬を選択する際の考え方はもちろん、漢方研究医が薬剤師に何を望んでいるか、患者さんが漢方医療に何を期待しているか」を学んだ。13年間在籍した東洋医学研究所の経験から、谿教授は「漢方医療を支える薬学を常に念頭において、仕事をするようになった」という。

90年からは、住友金属工業でバイオメディカル事業部医薬研究部長として8年間勤務。その間、企業における創薬研究を経験する傍ら、企業の「人材教育」や「文書作成法」について貴重な経験をした。

98年には、公募によって富山医科薬科大学和漢薬研究所（現・富山大学和漢医薬学総合

研究所）資源開発部門教授、04年には和漢薬製剤開発部門教授に就任した。

和漢薬研究所時代、谿教授は“大学の地域連携活動の重要性”を提唱。富山県薬業連合会、富山県くすり政策課、富山医科薬科大学（現・富山大学）の産官学協力体制のもとに、01年4月からスタートした「富山オリジナルブランド医薬品の開発事業」の中核となって手腕を発揮した。

この事業によって生まれた新配置薬「パナワン」は、現在のストレス社会に対応するための滋養強壮保健薬で、富山の配置家庭薬の伝統とされる牛黄、人參を中心に、11種類の漢方薬を配合した新しい処方構成が特徴だ。

研究面では、02年に中国内蒙古自治区で成功した甘草の栽培が特筆もので、日本薬局方に適合する甘草の栽培を見事に実現。中国で栽培された甘草の成分規格や抗アレルギー作用などを、総合的に検証した。

また、文部科学省の03年度21世紀COEプログラムに採択された「東洋の知に立脚した個の医療の創生」の事業担当者としても活動した。

教育面では、学内の講義に加えて、漢方に興味を抱いて全国から集まった学生を対象とした研究所夏季セミナーなどの講師も担当した。

その後、06年に薬学部（6年制：定員140人）が新設された大阪大谷大学の漢方医療薬学講座教授に就任した。「自らの漢方薬の知識と経験を生かして、漢方医療に興味を持つ薬剤師を養成したい」という強い思いが、谿教授を薬学教育の現場へと駆り立てた。

6年制薬学では、薬物と患者の関係性を扱う教育が強化されている。1年生を対象とした谿教授の

ズームアップ

大阪大谷大学薬学部
漢方医療薬学講座教授

谿 忠人氏



漢方医療に強い薬剤師を養成

「薬学概論」でも、心の苦悩と身体疾患との両面に応接する重要さを、漢方医療の心身一如の思想や望診、問診と絡めて「大阪弁で」講義する。「異なる世代の患者さんに、薬の説明ができる日本語力や人間力を養うことが大切」だと谿教授。そのためには、「人文社会科学系の教養科目を大切に、本や新聞を読んでほしい」とアドバイスする。

2年生には、「煎じ薬に配剤されたキザミ生薬を見分けて処方当てる」という実践的な鑑定実習を担当している。3年生には天然

薬用資源学の講義を行っているが、「4～5年生の漢方医療薬学ⅠとⅡの講義と、卒業研究ゼミを楽しみにしている」と笑みを浮かべる。卒業研究ゼミは、漢方医療の症例報告を題材にして、「専門用語の漢方医学的な意味を知り、その知識を医療現場で応用できる知恵に磨く」もので、将来の漢方相談薬局を担える薬剤師の誕生が期待される。

谿教授が立ち上げた漢方サークルの「漢方知源塾」も、漢方薬に興味を抱く学生に好評で、人数も四十数人にまで増加した。現在、漢方用語の基礎を勉強中の部員には、「肝胆相照らす、薯蕷のまんじゅうなど、漢方由来の言葉も常識として知っておくように教えている。将来は「薬局独自の生薬製剤の煎じ薬を駆使できる薬剤師」に育った卒業生と、漢方談義をするのが楽しみだと目を細める。



漢方知源塾での葛根湯の調製風景



経験と実績を積み重ねて30年
私たちは歩み続けています。



人と人とのコミュニケーションを育みたい。
そしてそれが大きな幹（ミキ）から伸びる枝葉のように、
未来に向かって広がってほしい。それが私たちの希いです。

株式会社 メディカルファーマシー

〒162-0056 東京都新宿区若松町9-12 KSビル 2F TEL 03-5368-2011

採用に関するお問い合わせは

人材開発部 saiyou@miki.ne.jp
<http://www.miki.ne.jp>

設立/昭和54年2月 資本金/5,000万円 売上高/114億円 従業員数/245名(薬剤師171名)
事業所/東京都17店舗、神奈川県5店舗、千葉県・埼玉県・栃木県・山梨県各1店舗